

講演

## アジアの伝統芸能、儀礼のデジタル化プロジェクトについて

野村伸一

わたしを含めて数名の者が現在、細々とやっているプロジェクトは「アジア基層文化研究会」といいます。現在、ここのホームページに数点の作品が掲載されています。これを作ることにしたいいきさつを少しお話しします。1995年に、韓国の延世大学と共同研究のかたちでフィールドワークをはじめ、これは三年ほどつづいたのですが、この間に、わたしたちは儀礼や芸能の記録をどうしたら多くの人に共有してもらえるかを考えました。

机と倉庫のなかにうず高く重なったフィルムとビデオテープが何ら役に立たないで埋もれていることに対して「何とかしなければ」と感じていたからです。しまっておいても結局、利用され得ない資料ならば、おもしろく公開してしまおうと考えたわけです。さいわい、大学の研究資金が得られたので、こうした芸能資料をインターネットで世間に公開しようと考えてスタートしたのですが、それからが大変でした。何しろ、最低限の機材を準備するのに三百万円ほどかかりました。これで資金の半分以上が消えてしまいました。今なら、数十万円で十分でしょう。いや、各人の持っているデジタルカメラ、ノートパソコンなどでも作業が可能です。しかし、はじめたころは大容量の記憶媒体が整えられないので、大学の機材を利用したのですが、何分手狭、そして人が少なくてなかなかこの作業だけやってくれる人がいませんでした。

そしてまた、この構想を実現するためにはいろいろと制約がありました。わたしの構想では次の三点ほどが前提として整っていなければなりません。

第一に、調査者の視点でそれなりにひとつの作品としてまとまっていること。いいかえると、あちこちの部分資料をつなぎ合わせただけの資料ではだめだということです。

第二に、調査者が現在おこなわれている祭儀なり芸能行為をみて、自分の目でまず文字原稿を書き、それに対応した映像資料を付けること。こういう意味では、現在みられなくなってしまったものは、いくら貴重でも残念ながら対象となりません。

第三に、文字原稿に写真、ビデオを挿入する箇所を明記して、これを作業する人に渡し、CD-ROM

化すること。そしてそれをインターネット上で公開すること。これが実はめんどろな仕事で壁となりました。原稿に写真を入れるだけなら簡単なのでしょうが、ビデオを挿入するとなると、とたんに滞ってしまう人が多いようです。三年たっても作品を出してくれない仲間もいます。

それはともかく、こうした三点が乗り越えられると、あとはコンピュータに通じた優秀な若い人の出番で、実際の作業はわたしなども知らないうちに進められました。四、五年前はビデオの圧縮にひどく時間がかかったのですが、現在はそれほどめんどろなこともなく、また動画をインターネットで公開するのもずいぶん簡単になりました。それに画質もそれほど落とさなくてもすむようです。

ここで、最新の作品を少し紹介します。

一、これは台湾の生育儀礼に関連する祭祀と芸能表現です。台南市に臨水夫人廟という女神をまつた廟があるのですが、ここではほとんど毎日、子供の成長を祈る儀礼がみられます。

二、次のものは韓国慶尚北道の海岸近くでおこなわれた死者霊儀礼オグクツの一場面です。

三、これは台湾の南側にある小琉球という島の王爺祭祀です。ここでは三年に一度海の彼方から王爺というおごそかな神がやってくるのです。そして、これを迎える十日ほどの期間、島は祝祭の雰囲気になります。

(cf. [www.flet.keio.ac.jp/~shnomura](http://www.flet.keio.ac.jp/~shnomura))

こうした作品化が何になるのか。多少、宣伝するというならば、今までこういうことを総合的に報じた媒体がほとんどないということ、そして将来にわたっても、あまり期待できないだろうという状況のなか、文字・写真・映像というかたちで基層文化の諸相を手軽に公開することは将来的にはより広がるべきものと考えています。

ただ数がいかに少ないのです。わたしは、現在、東アジアでいえば、二、三十の作品はほしいものだと考えています。とはいえ、数だけが問題ならば、それは何年かやっていけば実現できるでしょう。問題は、こういうことを公開していくことの意味です。それについて願いを込めて少し考えてみました。

第一にわたしはこのささやかな試みがあちこちの研究会で同時にいくつもはじまってくれればいいものだと考えています。ひとつの研究会が20作品として、もしも全国で10カ所、同じことをやってくれば200ぐらいにはなります。おそらくそのくらいのリストがあれば東アジアの基層文化に潜む代表的な祭祀芸能はとりあえずカバーできるでしょう。

そして第二に、こうしたことが同時に多発すれば、各地の研究会がそれぞれの基層文化の再発見をしていく契機になるのではないかとことです。たとえば、今、宮崎県の民俗学会がわたしたちの銀鏡神楽の作品にリンクを張っています。宮崎県、とくに西都市の人はこの作品をみて、おそらく足りない点に気づいたことでしょう。そしてその反応が地元のより緻密な作品となって花開けば、これはたいへんすばらしいことだと考えます。

第三に、これはあまりカネのかからない、しかも、だれかが牛耳るということもない知的なネットワークです。基層文化の芸能表現は将来的にはこうしたかたちで維持されていくのがもっとも好ましいだろうと考えます。

第四に、こうした作業を知的な営みとして積極的に評価する学会や文化系学問の雰囲気作りが必要です。わたしたちのばあいも、仲間の皆さんが今ひとつ本気で作品作りに携わらないのは、これが大学や研究機関などにおいて、目下はまだ「あそび」程度の扱われ方で、いわゆる業績にならないからです。しかし、文字原稿の論文をいくつか書くよりも、ひとつの総合的な作品がものをいうのが芸能表現の世界です。わたしは将来的には各人の完成したDVDなどがりっぱな業績として評価されることになるだろうと予測しています。

最後になりましたが、こうしたこと、作品化を含めてそれを幅広く奨励することは舞踊学会などが率先してやるといいのではないかと考えますが、いかがでしょうか。他のどんな専門分野よりも舞踊学会こそはこういうことをするのにふさわしいと考えるのですが、どうでしょうか。

個々の作品に対して、どのような項目、インデックスを付けるかなど、より一層具体的な議論がなされなければならないのですが、それは次の段階の各論ということになるでしょう。

これで基調報告に代えることにいたします。